

<研究報告>

EAP研究所の教育及び研究の場としての活用—今後の展開含めて

福田 早苗*¹・長見 まき子*²

Sanae Fukuda・Makiko Nagami

*¹ 関西福祉科学大学健康福祉学部/EAP研究所*² 関西福祉科学大学大学院/EAP研究所

要約

平成16年に設置された関西福祉科学大学EAP研究所は設立12年を迎える。その間、あけぼの会メンタルヘルスセンターからナカトミファティীগケアクリニックへと連携クリニックの移動などを経て、現在もインターンシップや大学院生の実習の場として活用されている。一方で研究所という名の通り、大学院生や教員の研究実践を通しての発信も重要な役割の1つである。本稿では、これまでのEAP研究所の教育及び研究を振り返り、今後どのように活用すべきかについて述べる。

キーワード：EAP研究所、教育、研究

I. はじめに

玉手山学園関西福祉科学大学EAP研究所（以下、EAP研究所と略）は平成16年4月に「あけぼの会」と共同で立ち上げられた我が国初のEAP研究所である。EAP研究所は、初めての学園敷地外の玉手山学園の付置施設として、学園外の社会的貢献をしつつ、学園の発展に寄与することが期待されてきた（柳井，2004）。EAP研究所は、心の健康対応を主として企業勤労者を対象として「職域管理者および関係者に対する心身の健康に関する教育訓練および研修」を業務としている。平成18年からは年1回「こころと健康と経営フォーラム」が開催され、その他、事業場内メンタルヘルス推進担当者の養成講座の開催、少人数専門家によるクローズドの事例検討会、復職支援プログラム「SPICE」を実施している。平成27年度からは連携医療機関がナカトミ

ファティীগクリニックに変更したが、これらの当初目的を十二分に達成している。

また、忘れてはならないのは、EAP研究所が学部学生・大学院生の教育の場として活用されていることである。EAP研究所では、平成18年度から関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科臨床心理学専攻（以下、臨床心理系と略）の大学院生が産業領域における心理臨床の場として実習を行っている。平成18年度1名、19年度1名、20年度1名、21年度2名、22年度3名、23年度2名、24年度2名、25年度3名、26年度3名、27年度2名、合計20名の大学院生が実習を行った。平成28年度は3名の大学院生が実習を行った。また、平成26年度からは関西福祉科学大学健康福祉学部健康科学科（以下、健康科学科と略）の学部学生のインターンシップ生の受け入れが開始され、初年度2名、平成27年度3名、平成28年度3名の学部3年生がインターンシップを実施

した。このようにEAP研究所の教育の場としての活用は近年拡大している。

一方でEAP“研究所”との名の通り、大学院生や教員の研究実践を通しての発信も重要な役割の一つとなってきた。大学院生や研究所所員（関西福祉科学大学教員兼任）による関西福祉科学大学EAP研究所紀要（以下、EAP紀要と略）による論文・報告による情報発信などもむろん重要な研究成果である。ナカトミファティーグケアクリニックは、ストレスや疲労、睡眠の客観的評価体制や血液検査体制等が整備されており（中富, 2015）、今後は連携することでSPICEの客観的効果検証等、新しい成果を発信できる可能性がある。本稿では、EAP研究所の教育の場としての効果検証を大学院生・学部学生の実習報告のテキスト・マイニング手法による分析結果から明らかにするとともに、研究の今後の展開についての試案を述べることとする。

II. 大学院生・学部学生の実習報告の質的分析

テキスト・マイニング法は、コンピュータによってデータの中から自動的に言葉を取り出し、さまざまな統計的手法を用いた探索的な分析を行うもので（樋口, 2014）、質的データの中でも特に文章型のデータを分析することができ、近年インターンシップや様々な実習報告などの内容分析に使用されている（向井, 2014, 片瀬, 2015）。臨床心理実習の評価指標を作成する目的で本分析を用いた報告が認められるが（古田, 2016）。EAP研究所での実習のような産業領域での臨床心理実習は全国でも珍しく、今後、臨床心理関連の資格に伴う産業領域での実習評価や実習指導に役立つ可能性がある。

1 方法

平成18年度から平成27年度までのEAP紀要に掲載された大学院生の実習報告及び平成

27年度の学部3年生の実習（インターンシップ）報告を題材とした。これらの著作権があるEAP紀要から分析の許可を得た。EAP紀要に掲載された実習報告それぞれをKHcoder（樋口, 2014）を用いてテキスト・マイニングを行った。分析対象から、固有名詞、組織名、人名、地名、ナイ形容、副詞可能動詞、平仮名のみ副詞、名詞、動詞、形容詞、及び一文字名詞、否定助動詞、形容詞（自立）を除いた。また、A、B、M、方々、話、お話、具体、関西福祉科学大学、様子、筆者、ティー、フル、ボディ、様々、メンタルヘルスセンター、ヘルス、ヘルスセンター、大学、自分は強制的に使用しない語とし、逆にマインドfulness、ティータイム、ボディワーク、EAP研究所、産業領域、メンタルヘルスは強制的に出現する語として指定した。頻出語句の分析、階層クラスター分析では、大学院生・学部学生双方の報告書を一緒に分析し、その後の共起ネットワーク分析では大学院生・学部学生それぞれの関連語を分析した。これらの分析も全てKHcoder（樋口2014）を用いて実施した。

2 実習の形態

EAP研究所での臨床実習の位置づけは、臨床心理士になるための臨床心理系の学生が行う臨床実習であり、人数としては例年1-3人が通例で、数は少ないものの90時間以上の実習を通して、職場復帰を目指す社会人の対応やEAP活動のプロセスを学び、将来の臨床活動に役立つスキルを高めるものである（大野, 2007）。臨床心理士の中で、働く人たちの職場復帰や職場での健康活動の普及にかかわる者は、病院臨床や学校臨床におけるよりも少なく（大野, 2007）、産業臨床について学べる場も日本にはあまり多いとはいえない。しかし、現在の日本の労働環境は連日新聞をにぎわす過重労働や、過労自殺等のニュースに代

表されるように良好とは言い難い。こういった時代に産業臨床現場での臨床心理士の養成は、社会的ニーズが高いものと考えられる。

一方、EAP研究所でのインターンシップの位置づけは、上記とは大きく異なり、学科での学びを深めるためと社会体験を主としている(福田, 2017)。こちらも人数としては3-4人であるが、期間は5日間と短く、臨床実習ではなく、プログラムの体験や観察といったことが主となる。

3 結果

大学院生は合計20名、学部学生は3名の報告書の分析を行った。記述統計の結果、958種類の語が分析対象となり、平均出現回数は6.20回(標準偏差15.94)であった。1回だけしか出現していない単語が409種類あり、全体の42.7%を占めた。表1に頻出150語を示す。EAP研究所の実習報告で出現頻度が高い語には「参加」「実習」「プログラム」「学ぶ」「支援」「復職」「心理」などがある。これは実習に参加し、復職支援プログラムで学ぶという意味だと考えられる。

(1) クラスタ分析

実習に特異的な語の抽出のため、出現頻度が20回以上の抽出後59語について階層的クラスタ分析(Ward法)を行ったところ8つのクラスタを得た(表1)。以下〈 〉はクラスタ名、「 」は抽出語とする。

クラスタ1は、「行う」「SPICE」「支援」「プログラム」「復職」「感じる」「実習」「参加」「学ぶ」といった抽出後から構成されていた。これらは、復職支援プログラムSPICEもしくは、実習そのものにして参加するといった内容であったのでクラスタ1を〈実習参加〉と名付けた。

クラスタ2は「作業」「能力」「改善」「うつ病」「休職」「報告」「貴重」「体験」「陪席

といった抽出語から構成されていた。これらは休職者が復職支援プログラムによって、作業能力を改善する経緯を観察するといった内容であったので、クラスタ2を〈復職支援プログラムによる学び〉と名付けた。

クラスタ3は「臨床」「産業領域」「機会」「心理」「得る」「メンタルヘルス」「関係」「職場」「復帰」といった抽出語から構成されていた。これは、産業領域における心理臨床に係る内容であったのでクラスタ3を「産業領域臨床」と名付けた。

クラスタ4は「療法」「行動」「生活」「アサーション」「トレーニング」といった抽出語から構成されていた。復職支援プログラムで参加者が体験する具体的な内容のうちアサーショントレーニングと生活行動トレーニングを表わす語であることから、クラスタ4を〈プログラム内容-アサーション及び生活行動トレーニング〉と名付けた。これは、次のクラスタ5にも同様の異なった種類のプログラム内容が出てくるので区別するためである。

クラスタ5は「変化」「体調」「朝礼」「メンバー」「グループ」「ミーティング」といった抽出語から構成されていた。クラスタ4と同様に復職支援プログラムで参加者が体験する具体的な内容を表わしたが、主に朝礼時のメンバー(参加者のこと)の変化の観察、参加者のグループミーティングに関連する語であることから、クラスタ5は〈プログラム内容-朝礼及びグループミーティング〉と名付けた。

クラスタ6は「EAP」「スタッフ」「カンファレンス」「検査」「実施」「利用」「内容」「状態」「重要」といった抽出後から構成されていた。これは大学院生に多く出てきた実際に心理検査を実施した経験とEAPスタッフのカンファレンスの実施に関連する語であるので、クラスタ6は〈産業領域臨床の実際

と名付けた。

クラスター7は「勉強」「産業」「経験」「必要」といった抽出語から構成されていた。これは産業領域の臨床において必要なことが何であるかが勉強になったという意味の語であるので、クラスター7は〈産業領域臨床での学び〉と名付けた。

クラスター8は「援助」「理解」「実践」「活動」「EAP研究所」「考える」「思い」「知る」といった抽出後から構成されていた。これはEAP研究所で実践している援助活動を理解し、そこから学んだことなどを表わす語であるので、クラスター8は〈EAP研究所における学び〉と名付けた。

表 1. 階層クラスター分析

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7	クラスター8
実習参加	復職支援プログラムによる学び	産業領域臨床	プログラム内容-アサーション及び生活行動トレーニング	プログラム内容-朝礼及びグループミーティング	産業領域臨床の実際	産業領域臨床での学び	EAP研究所における学び
行う	作業	臨床	療法	変化	EAP	勉強	援助
SPICE	能力	産業領域	行動	体調	スタッフ	産業	理解
支援	改善	機会	生活	朝礼	カンファレンス	経験	実施
プログラム	うつ病	心理	アサーション	メンバー	検査	必要	活動
復職	休職	得る	トレーニング	グループ	実施		EAP研究所
感じる	報告	メンタルヘルス		ミーティング	利用		考える
実習	貴重	関係			内容		思い
参加	体験	職場			状態		知る
学ぶ	陪席	復帰			重要		

(2) 共起ネットワーク分析

図1に大学院生・学部学生毎の共起ネットワーク分析の結果を示す。○の大きさは大きい程、回数が多く、線は太い程関係性が強いことを示す。まず、大学院生・学部学生に共通する語として、「SPICE」「学ぶ」「参加」「実

習」「プログラム」「復職」「行う」「体験」「貴重」「支援」「考える」が現れた。これらは「実習に参加し、SPICEといった復職支援プログラムから学び、実際にプログラムのいくつかを体験するという経験を貴重である」といった内容の記述がなされていたことを示す。大

学院生と学部学生と比べると学部学生の方が様々な語との関連があるように一見すると見えるが、これは学部学生の報告が3例しかないのに対し、大学院は20例あり、語が集約されやすかったためだと考えられる。大学院生では、「心理検査の実際の経験、臨床実施の場への陪席が臨床経験として重要な機会を得

た。」と考えている。学部学生の報告は、どちらかというとプログラムの中味と考えられる「朝礼で体調変化を聞く」、「アサーショントレーニング」「ミーティング」「生活行動変容プログラム」「作業内容」といった語や「EAP研究所での活動を実感」といった体験要素が強い記述となっていた。

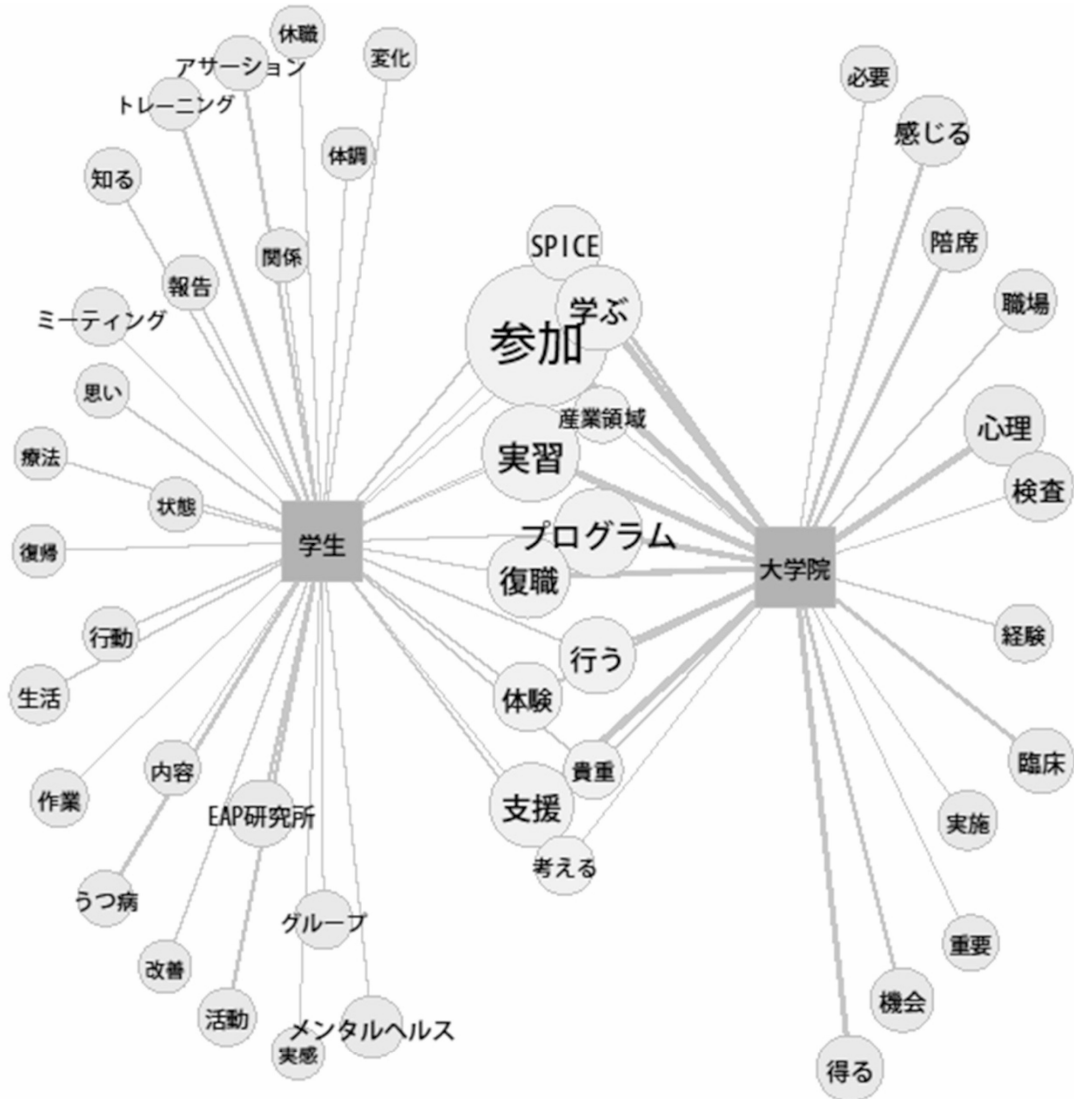


図1. 大学院生・学部学生毎の共起ネットワーク解析（20回以上の頻出後）

学生：インターンシップの学部学生

大学院生：心理臨床実習の大学院生

4 考察

EAP研究所において心理臨床実習行った大学院生、インターンシップを行った学部学生それぞれの報告書のデータ・マイニング法を用いた解析を実施した。その結果、総じて学生においては「プログラム」に参加しているという意識が強く、大学院の場合は「主体的に実習に参加している」といった傾向が見られた。ただし今回の結果は、大半が大学院生の臨床実習の報告を分析したものであり、学部学生のインターンシップの効果も表わしているとは言えない可能性はある。

クラスター分析の結果、8つのクラスターが抽出され、それらは、EAP研究所の実習で何を学ぶことができるかを示していると考えられた。まず、実習に参加すると復職支援プログラムSPICEを体験・参加することになる。次にそのプログラムによって参加者がどう変わっていくかといった臨床の場に陪席することで、特に大学院生にとっては重要な臨床経験となるといえる。また、これまで社会人経験がない大学院生も多く、「産業領域の臨床」といったものがどのようなものかつかめなかった大学院生が「産業領域の臨床」に何が必要か（臨床だけを行ってればいいという訳ではないということ）を修得している様子が見て取れる。また、心理検査を実施し、その結果から読み取ることができることは、検査の内容だけでは不十分で、参加者の様子を観察するなど他の要素が非常に多いことも貴重な経験となっている。

共起ネットワーク分析の結果から大学院生にとっては貴重な「臨床経験」、学部学生にとっては貴重な「支援の現場体験」となっていると考えられた。大学院生に関しては、大半が現在のクリニックに移動する前の報告であり、クリニックの移動の影響がどう出るかは未知数である。また、学部学生のインターンシップは報告例が積み重なっていくものと考

えられるので、プログラムの体験報告だけではなく、そこから何を得たかについての報告が増えていくような内容を検討する必要がある。しかしながら、4~5日間という短いインターンシップ期間では内容の工夫が難しいようにも考えられ、学部学生のインターンシップの目的をどう設定するのか等についての事前事後指導に重点をおくべきかもしれない。

今後は、本人同意等をとって日誌の分析や指導内容等についても分析を進めることで、EAP研究所の教育効果が更に明らかになる可能性があると考えられた。

Ⅲ. 研究発展の可能性

EAP研究所では現在、箱づくり法検査を用いて復職支援プログラムに参加するうつ病患者の作業遂行特性についての研究が実施されている(巽, 2015)。その他、復職支援プログラムSPICEでは、「認知行動療法プログラム」や「生活習慣マネジメントプログラム」等が実施されている。一方、ナカトミファティーグケアクリニックでは、開院時から、客観的疲労検査を実施している(中富2015)。疲労検査として自律神経機能や酸化ストレスの他、睡眠の評価も実施している。これらの評価は、復職支援中の回復度合いの評価や対象者の気づきに役立つことが報告されている(中富2015)。これらの検査を加えた研究体制を構築することは、EAP研究所の研究成果の発信として新たな可能性を与えると期待される。現在、連携し共同研究を実施できる体制を構築中である。

復職支援の結果は、前後の解析をするにあたって例え対象者によって前後の期間が異なる等、解析には検討すべき点が多々ある。また、一口に復職支援対象者といっても、背景疾患、年齢、職務歴、職種等、様々な背景があり、個別性が重要視されるため客観評価をどのように役立てていくのかといった課題もある。これらの課題を克服し、国内外に成

果を発信することが必要と考えられる。

IV. まとめ

本稿では、EAP研究所の一般的に世間に知られている「職域管理者および関係者に対する心身の健康に関する教育訓練および研修」業務以外の側面に焦点をあてた。教育の場としての活用や研究成果の発信により、EAP研究所のさらなる発展とともに、本施設が付置されている玉手山学園関西福祉科学大学のプレゼンスを高めることに寄与可能であると考えられる。

引用文献

- 柳井勉. (2004) 関西福祉科学大学EAP研究所の遠隔. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要, 1, 1-2.
- 中富康仁, 山本春香. (2015). 復職支援プログラムにおける客観的疲労検査の有用性. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要, 第10,29-36.
- 樋口耕一. (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 向井淳治, 徳山絵生, 木本美香, 宮武望, 小野原未由来, 本莊愛美, 濱田藍子, 高橋直継. (2014). テキストマイニングによる病院実務実習日誌の分析. 医療薬学,40,245-251.
- 片瀬拓弥. (2015). インターンシップ自己評価表のテキストマイニング分析. 清泉女学院短期大学研究紀要,34,1-10.
- 古田雅明, 加藤佑昌, 森本麻穂. (2016). 医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究. 人間生活文化研究,26,31-36.
- 大野太郎. (2007). EAP研究所における大学院生実習活動. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要第,2,75-76.

- 福田早苗, 木村貴彦, 松村歌子, 長見まき子, 山内彰. (2017) K大学H学科におけるインターンシップ導入の意義と課題 文献的考察を含めて. 総合福祉学会誌.
- 巽絵理. (2015). 復職支援プログラムに参加するうつ病患者の作業施行特性—箱作り法検査を用いて—. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要, 10,37-44.